アメリカ英語の特色（Ⅶ）

American English by Albert H. Markwardt を中心にして

澤　田　照　徹

初期近代英語の語法と アメリカ俗語の語法（つづき）

目　　次

頁
（はしがき）…… 158
E．動詞語形の単純化…… 158
1）現在時制の語形…… 158
2）過去時制と過去分詞の語形…… 163
a. 強変化動詞の活用語形の単純化…… 163
b. 強変化動詞に対する弱変化動詞活用の拡大適用による単純化…… 166
c. 初期近代英語における強変化動詞の活用形と，アメリカ俗語の語形変化の「遅行性」…… 169
参考文献…… 185

アメリカ俗語の語法

《はしがき》

我々は前章（本誌第13巻第1号）の末尾で，「動詞語形の単純化」という言語事象の本論に入るに当って，その前置きとして，『現代標準英語とアメリカ俗語とが，それぞれ最大限に遊離した語形を示しているのは何と言っても動詞の領域に於てである。動詞語形の単純化の現象は，既に故人になったロバート・メナー（Robert Menner；Kurath 教授の「言語地理」の編輯協力者）によって，「卑俗語」（the vulgate）の特長として挙げられた所のものではあるのだが。』と述べておいたが，我々は漸くここでその本論を取上げる機会を得た。

E.　動詞語形の単純化

1）　現在時制の語形

先づ第1に，動詞の現在時制（Present tense）に就いてであるが，アメリカ俗語では3人称・単数たることを示す明晰な語形変化（inflection）を削除してしまうという傾向がある。それは he want; she write に見られるように -s 語尾を削除することによってこれを行なうか，或いは I has some good friends. You is in lots of trouble.（おめえさん，苦労が多いねぇ）に見られるように，3人称単数だけに用いる特殊な動詞語形を1人称及び2人称にも拡大類推適用することによってこれを行なうものである。

アメリカ俗語のこのような用法に接する時には，我々はどうしても再び古い英語が辿った歴史的姿がどんなものであったかに立ち戻って眺め直してみる必要がありそうである。

話しが少しこみ入るが，ここでは便宜のために人称別に現在時制動詞が

語尾に採った語形をひとわたり眺めることにしよう。

1人称・単数・現在・直説法たることを示すために，古代英語（500—1200年）は動詞の語尾に -e を持っていた。ところがこの -e は中世英語（1200—1500年）の時代になって次第に脱落し，その結果として，動詞は接尾辞のない語形で用いられることになり，このことは計らずも無主語・無時制の不定詞形と一致することとなった。と言うのは，他方において不定詞の方でも，それが，かつて持っていた最終接尾辞の -n を古代英語時代の末期において既に失ってしまい，続いてその後になって動詞の語尾として保持していた -e をも失ってしまっていたからである。

次に2人称・単数・現在・直説法たることを示すために初期近代英語（1500—1800年）は，動詞の語尾に-(e)st を持ち，また時には -(e)s を持っていた。試みに1611年に刊行された欽定英訳聖書（Authorized Version of the Bible）を眺めてみると，「ローマ人への手紙」の第2章22に，"*thou* that *sayest* a man should not commit adultery, *dost thou commit* adultery?……"（姦淫するなと言って，自らは姦淫するのか……）と書いている。

次に3人称・単数・現在・直説法の場合にはどうであったろうか。初期近代英語の時代において，3人称・単数・現在たることを示すため動詞の語尾に，-(e)s と -(e)th との両形が動揺しながら用いられていた。上述の欽定訳聖書の中では勿論のこと，「祈禱書」（the Book of Common Prayer）の総ての版の中では -eth の語形が用いてある。それは H. C. Wyld（1870—1945，イギリスの英語学者）が，彼の「現代口語英語の歴史」（History of Modern Colloquial English, 1920）の中で指摘しているように，欽定訳の編輯者達は3・単・現動詞に添える -s 語形を日常談話（familiar speech）にだけ帰属するものと考えていたためであろう。例を聖書の「コリント人への手紙」の1節からも引用してみよう。"*He* that *speaketh* in a tongue *edifieth* himself; but *he* that *prophesieth edifieth* the church"—1. Cor. XIV. 4.（異言を語る者は自分だけの徳を高めるが，予言をする者は教会の徳を高める）。もう1

節を「ルカによる福音書」から取ってみると，“and no *man* having drunk old wine *desireth* new; for *he saith,* The old is good”—Luke. Ⅴ. 39.（まだ，だれも，古い酒を飲んでから，新しいのを欲しがりはしない。「古いのが良い」と考えているからである）とある。動揺的に用いられていたこの -(e)th と -(e)s の両語形も，17世紀初頭を起点として，-(e)s が優勢を示す運命になった。ただ詩の中ではなおその両形が用いられてよかった。Shakespeare も，彼の「ロミオとジュリエット」の中で淡々として両形を合わせ用いている。“Sometimes she *driveth* ore a Souldiers necke, & then *dreames* he of cutting Forraine throots”—Romeo and Juliet. Ⅰ. iv. 82—83,（《マブの女王は》時に兵士の首筋を駆けめぐれば，敵兵の首を取る夢を見る）。然し do と have の2つの動詞の場合には，-(e)th 形が長い生命を維持し，do 動詞では3・単・現・直説法で doth〔dʌθ〕，2・単・現・直説法で doeth〔dú:iθ〕，過去形で didst の語形で用いられ，have 動詞では3・単・現・直説法で，hath〔hæθ〕，過去形では2・単で hadst の形で，それぞれ18世紀中葉までも用いられていた。

do，have 動詞に限らず，今日3人称・単数・現在・直説法の動詞に添えて用いる -s 語尾は，北部ノーサンブリア方言（Northumbria dialect）の影響を受けたものであると通常は考えられている。中世英語時代南部方言のあるものは3人称・複数・現在・直説法の動詞は接尾辞 -eth を持っていたし，また中部方言では -en を用いていた。けれどもこれ等の方言的動詞の語形変化は，14世紀という未だ中世紀時代に既に消滅する運命に襲われて，その結果3人称・複数・現在・直説法の動詞は接尾辞を持たないこととなり，それが現在に及んでいる。ただ複数の場合のこの -eth 語尾と -ith 語尾は16世紀に入った時期まで残っていた。また北部方言の由来を持った（Northern provenience）3人称・複数の動詞に添えた -s 語形は，Shakespeare も彼の「ヴェニスの商人」の中に用いて，

“O, these naughty times

Puts bars between the owners and their rights !”—（ああ，

今日このごろの怪《け》しからん世の中では，持主がその当然の持物を自由にするわけにいかない！—研究社，新訳注双書，沢村寅二郎訳）

と言っているし，またエリザベス王朝（Elizabeth Ⅰ. 1558—1603年）の他の作家達の作品の中にも，この用法は起っている。3人称・複数動詞に添えるこの -s 語形は，3人称・単数動詞に添える -s 語形を間違えて複数動詞に用いた「非文法的」語法（"ungrammatical" uses）であると見做すのは正しくない。「現代口語英語の歴史」の中で H.C. Wyld が確信する所によれば，『複数動詞に添えるこの -s 語形は，北部方言の影響によるというよりは，寧ろ単数動詞に添える -s を，複数動詞の語尾に迄類推的適用を行った結果であることは確かである。言語の類推作用は非常に強いので今日に至っても人口のうちの或る割合の人々は，3人称・単数・現在・直説法動詞に添える -s 型に見ならって総ての人称の単数動詞と複数動詞の両方に無差別に -s を添える慣習を持ち，また他の部類の人々は逆に，総ての人称の単数・複数動詞から，無差別に接尾辞を脱落する慣習を持っている。』

これら2種の言語慣習は互に相反する結果を持つが，その手順はどちらも，類推作用によって同一語形を他の動詞にまで拡大適用して単純化（均一化と言ってもよい）する手続きである。また第1種の類推適用について言えば，3人称・複数・動詞に -s を添える手続きを更に進めて，1人称・2人称の動詞にまで3人称・単数・現在・直説法動詞の -s 語尾を類推拡大適用する慣習は，"I says" や "says I" のような表現を当り前のしゃべり方だと心得る素朴で単純な座談家，話術師（naïve raconteurs）の日常談話の語法の中で特に目立って多い。又「おかしいねえ」という不納得を表わすのに彼等がよく用いる "Sez you!" というような「粗野な表現」も，この類推使用によるものである。

初期近代英語の時期に入って以来現代英語に至る英語の歴史の発展を通じて，その動詞が，3人称・単数・現在・直説法である事を示す接尾辞がこのように顔を出したり，脱落したりした現象は，何時の時代にあっても大（おお）綱（づな）として一貫して働き続けた類推作用に基ずく単純化の

結果である。このような言語事実を思う時に我々は，前述したようにアメリカ俗語で he want; she write と言い，I has……，You is……と言うのも容易に理解することが出来る。

「トムソーヤー外遊記」（前出）から引用してみよう。

"Now den! *is you* gwine to tell me it's dis year in one place en las' year in t'other, bofe in de identical same minute?"（それじゃなあ！　両方とも同じ時間に，ある場所じゃ今年で，別の場所じゃ去年だとでも言おうと，いうんか—den＝then; gwine＝going to; dis＝this; las'＝last; en＝and; t'other＝the other; bofe＝both; de＝the）。

"You look at it, and see ef *I's* right"—（これを見てみろよ，そうすりゃおれの言ってるとおりだってことが分るよ—ef＝if"）。

"Now, den! *Do de Lord* make anything in vain?"（そいじゃ，かみって何の役にも立たねえもんを造るんかい—anything in vain＝anything that is no good）。

"What *does you* do wid it?"（それをおめえはどうするんだ—wid＝with）。

「ハックベリー・フィンの冒険」の中でも例は多い。

"*Jim don't* know nobody in China"—（第35章）（ジムは中国には，知っちょる奴もおらんだ）。

"Well, looky here, boss, dey's sumf'n wrong, dey is. *Is I* me, or who is I? *Is I* heah, or whah *is I*? Now dat's what *I wants* to know?"—（第15章）（あのな，大将，これゃ何かが狂ってるだ，間違えなく狂ってるだよ。おらはおらなのか，それとも誰なのかな？　おらはここに居るだかな，それともどこに居るだかな？　そこばおらは知りてえだよ—looky here＝look here; dey's sumf'n wrong＝there is something wrong; heah＝here; whah＝where; dat's＝that is）。

「アンクル・トムの小屋」の中にもある。

"Well, now, *I hopes* you're done"—

（第3章）（さて，さて，おしまいとしてもらおうか—you're done＝you have finished）。

"*We wants* to sit up to meetin'—*meetin's is* so curis"—（同章）（集会まで起きていたいなあ—集会ってとても面白いんだもの—curis＝curious）。

2） 過去時制と過去分詞の語形

続いて動詞の過去形（preterit forms）及び過去分詞形（past participle forms）に就いて眺めてみよう。

ひと口に言えばアメリカ俗語の動詞の語形と，標準英語の動詞の語形とが，3・単・現・直説法におけるその接尾辞の出没において，それぞれ最も遠く遊離（deviation）してしまったのが，動詞の過去形と過去分詞形の領域においてであったという事である。

a. 強変化動詞の活用語形の単純化

標準英語の動詞の語形変化（conjugation）からアメリカ俗語の動詞の語形変化が遊離し行くその行き方は興味ある特色をなすもので，殊に動詞のうちでも，標準英語で過去形と過去分詞形とが，或る程度不規則な語形変化を行なう種類もの，即ち英語史の上で強変化動詞（Strong verbs）と名付ける動詞の場合に起ることが多い。

〔註〕「強変化動詞」とは，過去形，過去分詞形を作るのに語幹の母音を変えるもの，例えば speak-spoke-spoken のようなもので，現代英語で言う「不規則動詞」に大体は一致している。これに対し「弱変化動詞」（Weak verbs）とは，過去形，過去分詞形を作るのに，歯擦音接尾辞の -(e)d, -t などを添えるもの，例えば rain-rained-rained; hear-heard-heard; think-thought-thought のようなもので「規則動詞」に大体は一致している。

アメリカ俗語の動詞では，ここでも又2つの相反する傾向が働き，それ等が帰せずして，動詞活用形の単純化をもたらしている。そしてその1つは，古代英語時代に強変化動詞として，原形—過去単数形—過去複数形—

過去分詞形という活用を行ない，それぞれ母音を異にした4部分動詞であったものが，類推作用によって，原形—過去形（または過去分詞形）という2部分動詞へと単純化を実現するという遊離の仕方をしたものがある。即ち(1)原形のほかに，過去分詞形のみを持ち，それに過去形・過去分詞形の2役を演ぜしめたものと，(2)原形のほかに，過去形のみを持ち，それに過去形・過去分詞形の2役を演ぜしめたもの，とである。

捕える対象を(1)，(2)ともにアメリカ俗語の領域の中から見出して，例示するのが良いと思う。

(1)　過去分詞形を，過去形として用いたもの。

アメリカ俗語が write の過去形として用いている writ （この語形は標準英語の中でも，最近まで wrote と共に過去形として動揺的に用いられていた—後出）という語形は，実は古代英語が過去時制・複数形として用いた所のものであったし，同じくアメリカ俗語が begin, swim の過去形として用いている begun, swum も古代英語が過去時制・複数形として用いた所のものであった。

このように，古代英語時代の動詞の時制上の用法を今日に及んでも用いているアメリカ俗語からの用例を，

「二十日鼠も人間も」，その他の中から引用してみよう。

"That big son-of-a-bitch *done* it. I know he *done* it."—（第5章）（あのでか野郎がやったんだ。やつがやったのをおらあ知ってるぞ）。

"I *seen* it this morning," said Carlson.（第5章）（「おれはけさ見たんだ」とカールスンが言った）。

「トムソーヤー外遊記」の中からも引用するとしよう。

"So the man *done* it, and sure-enough he was as blind as a bat in a minute."（そこで男は箱を開いた，するとあんのじょう，あっというまに，コーモリのように目くらになっちまったんだ—done＝（ここでは）opened the box）。

"Jim *begun* to snore."（ジムはイビキをかき始めた）。

「ハックルベリー・フィンの冒険」の中からも引用しよう。

"Den I *swum* to de stern uv it, en tuck aholt."—（第8章）（筏が来たところで，おら，その艫（とも）のところさ泳いで行って，しっかと摑まっただ—Den=then; uv=of; en tuck aholt=and took a hold.

"Who *sung* out? When did he sing out?"—（第34章）（誰がどなったんだ？　いつどなったんだ？）

"Well, are you rich?"

"No, but I *been* rich wunst, and gwyne to be rich again."—（第8章）（「そんなら，おめえ，金持ちか？」「うんにゃ，したけど，いっぺんは金持ちぢゃったし，やがては，もう一ぺん金持ちになるだ—wunst=once; gwyne=am going)。

同様に take についても過去分詞形を過去時制に用いて，I taken（=I took）と言う。

(2) 過去形を，過去分詞形として用いて，それに補助形を添えて，have gave（=have given), have wrote（=have written), has went（=has gone）のような言い方で，完了時制を造るのも，アメリカ俗語の語法である。

実例を，「二十日鼠も人間も」その他から引用しよう。そこでは過去分詞 done, gone, taken, known. ridden, broken 等の代わりに，did, went, took, knew, rode, broke 等を使用している。

"Her neck's bust, Lennie *coulda did* that."—（第5章）（女の首は折れてるぜ。レニイならそれぐらいやれるだろう—neck's bust=neck is burst; coulda did=could have done)。

"He—would *of went* south; he said—"（第5章）（あいつは—南の方へ行ったと思うよ」と彼は言った—of went=have gone)。

"No. *it's been took*"—（第5章）（確かに，あれは盗まれたんだ—it's been took=it has been taken)。

"*I've knew* George since"—（第6章）（ずっと前からおれはジョ

ージを知ってるんだ—I've knew=I have known)。

"We *could* just as well *of rode* clear to the ranch……"—（第1章）（ちょうど農場のところまで乗っていけたんだが)。(could……of rode=could……have ridden)。

"That mouse ain't fresh, Lennie; and besides, *you've broke* it pettin' it"—（第1章）（あの鼠は腐りかけてるんだよ，レニイ。おまけに，おまえがなで廻して目茶苦茶にしちゃったんだ—you've broke=you have broken; pettin'=petting)。

「ハックルベリー・フィンの冒険」の中にもある。

"Why, child, *it'll be stole*!"—（第32章）（それじゃ，おまえ，盗まれるんじゃないの！）(it'll be stole=it will be stolen)。

"I see I *had spoke* too sudden, and said too much"—(第28章）（おらは，あんまり無考えに，あんまり余計なことをしゃべっちまってよ—had spoke=had spoken)。

b. 強変化動詞に対する弱変化動詞活用の拡大適用による単純化

動詞の活用形の単純化の2つの相反する傾向のうちのもう1つのものは，これも古代英語の時代に強変化動詞として4部分動詞であったものに起った言語現象であった。そもそも古代英語で強変化動詞として扱かわれたものは，その動詞活用を行なうのに様々な型の母音変化があり（通常過去形の作り方の相違によって7種の型に分類された)，正しく用いるのに困難を伴なう程の複雑なもので，言うなれば不規則な母音変化（irregularities）に満ちた活用形を持つ種類の動詞であったが，アメリカ俗語では，そのような活用形を棄て去って，-(e)d または -t を添えて過去形及び過去分詞形を造り上げた。言語史的に言えば強変化動詞を弱変化動詞へと移した。この場合も4部分動詞を類推作用によって，原形—過去形（または過去分詞形）という2部分動詞へと単純化を実現した。know, see などの過去形・過去分詞形として knowed, seed を用いるのがその例で

ある。

便宜のために，前掲のいくつかの作品から数個の例を引用してみよう。

"We *knowed* well enough that he was right and we was wrong."—「トムソーヤー外遊記」（奴の言うほうが本当で，おれ達のほうが間違ってることは，ちゃんと分っていたんだ）。

"He *ketched* a frog one day, and took him home."—「跳ぶ蛙」（あいつは，或る日蛙を一匹つかまえて戻ったんだ—ketched; catch の過去形として＝caught）。

"You got any rats around here?"

"No, sah, I hain't *seed* none"—「ハックルベリー・フィンの冒険」（一第38章）（「おめえ，ここに鼠はいるか」「いや，一匹も見たことねえな，旦那」sah＝sir; hain't seed＝haven't seen）。

"We *blowed* out a cylinder-head"—（同一第32章）（シリンダーヘッドが破裂したんです—blowed＝blew）。

"S'pose we must be resigned; but, O Lord! how ken I? If I *knowed* anything whar you's goin', or how they'd sarve you!'—「アンクル・トムの小屋」（'Uncle Tom's Cabin' by—第6章）（諦らめなければならないなんて。でも，神様，どうして私にそんなことができましょう？　あなたの行く先が少しでも分かるものなら，又どんな扱いを受けるかが分かるものなら！—S'pose＝Suppose; ken＝can; whar＝where; you's goin'＝you are going; they'd sarve＝they would serve; serve＝treat）。

"It was as big a fish as *was* ever *catched* in the Mississippi, I reckon"—「ハックルベリー・フィンの冒険」（第10章）（あんなでっかい魚って，ミシシピー川でもまだ捕まったことねえんじゃねえかな）。

このような2部分動詞への単純化は考えてみれば，実はアメリカ俗語に特有なものではなかったという事を我々は指摘するのがよいと思われる。

英語の動詞が辿ったその発達の歴史に於ける圧倒的に優勢な傾向はと言

えば，それは古代英語時代に強変化動詞が持っていた比較的重要でない活用形の幾つかを棄て去って，あっさり2部分動詞に加わったものが多いという単純化の傾向であった。

ミシガン大学のフリーズ教授（Charles Carpenter Fries）の "American English Gammar"（1940）の p. 60 の統計によれば，古代英語に於ける強変化動詞の数は312個，このうち約⅓は廃用に帰し，現代英語まで生き残っているものは195個，このうち過去・過去分詞形を-d または-t を添えて作る弱変化に吸収されたものが129個で，残り66個が語幹の母音変差によって3主要形を作る強変化活用型を保っている。更に最後の66個も，そのうち24個は過去・過去分詞が同形化し，僅かに42個が，現在・過去・過去分詞が3つとも異なる母音変化を保っているという。そしてこの最後の66個の動詞が，現代英語の「不規則動詞」の母体をなしている事は言う迄もない。現代英語の時代でもなおこのような動詞の単純化作用は進行中であると言える。例えば同一語で規則・不規則両活用を併用するものがあり，また同一不規則活用語で2種以上の活用形を持つものもある（但し多くの場合活用形の異なる場合は意義と用法の分化が認められる）。そして現代英語で，動詞の活用が新しく不規則活用型に編入されることは殆んど無いところから，不規則活用型を「死活用」（Dead Conjugation）と呼ぶこともある。

〔註〕 現代英語の動詞の活用形を記述的文法の観点に立って言えば，「不規則変化動詞」は約200語で派生語・複合語を加えても約300語に過ぎず，数万語に及ぶ動詞のうち極めて小さい部分をなすのみである。然しながら，それ等は一般的に言って使用の頻度は極めて高く，日常生活に重要な語彙を形成し，大多数は単音節語である。

極めて少数の例にしか過ぎなかったが，上に掲げたアメリカ俗語がその動詞の活用形の中で辿っている類推適用の方向は，おしなべてアメリカ俗語の進展の方向を示すに十分であろう。従って古い英語の動詞が辿った活用の全部を眺める必要は我々には無いと思われるので，強変化動詞のうち大体，上に例示したような動詞の活用例を中心にして初期近代英語の時代にこれと同じ用い方がなされていたことを眺めてみることが，アメリカ俗

語の動詞の活用形の「遅行性」を示そうとする本項の目的に適うであろう。

c.　初期近代英語における強変化動詞の活用形（Conjugation）と，アメリカ俗語の語形変化（Inflection）の「遅行性」

7つの群に分れていた古代英語の強変化動詞を，ここでは第1群から第7群へと順次に眺めることはせず，我々の関係ある群だけに記述を限定し，その群の中の動詞の活用に起った若干の事項を併せ記すに止めよう。

know は第7群に属した強変化動詞であって，強変化活用のままで今日に生き残っている blow, grow, fall, hang, hold などと同類の変化形を持つ1語である。これらの動詞は今日なお，例えば blow-blew-blown と活用するが，hang（吊す）は「首を絞める」の意味では過去・過去分詞では弱変化活用の hanged が用いられ，fall の過去形 fell は17世紀においては屢々過去分詞形として用いられた。Shakespeare も彼の「リヤ王」の中で，"Ten masts at each make not the altitude which thou *hast* perpendicularly *fell*"—King Lear. Ⅳ. 6. 54（帆柱を十本繋(つな)いでも，お前さんが真直ぐに落ちて来たあの天辺までは届かぬのにな—新潮世界文学，福田恆存訳）と書いている。それに knowed は勿論のこと，弱変化過去形の blowed, growed も初期近代英語では屢々起っているし，また E. Bagby Atwood の「東部合衆国における動詞語形概観」('A Survey of Verb Forms in the Eastern United States', 1953. pp. 15—16）が述べているように，アメリカ俗語の中に生き残っている。本項末尾近くに掲げた「怒りの葡萄」はその用例を含んでいる。

第5群強変化動詞 see と give に就いて言えば，過去形としては saw が近代英語以来今日でも圧倒的に用いられているが，see がそのまま過去形としても用いられており，殊に民俗談話の中では過去形として用いるのが普通である。see の弱変化活用形の seed は，民俗談話の中に限られているが，see の過去形として用いられており，同様に過去分詞形の seen もまた民俗談話では過去形として用いられている。see と同じく強変化動詞である shake に -ed を添えて弱変化動詞的に用いる用法も行なわれ

た。Shakespeare も彼の「嵐」の中で，

"……I heard a humming,

And that a strange one too, which did awake me ; I *shaked* you, sir,……" The Tempest. 11. i. 319（私は蜂の唸るような，しかも妙な音を聞いて，それで眼をさましたので，陛下を揺り起して叫びました—研究社訳注叢書，沢村寅二郎）と言っている。また「オセロ」の中で，

"The wind-*shaked* surge, with high and monstrous mane, Seems to cast water on the burning bear"—Othello. 11. i. 13（いらだつ波頭は天に沖（ちゅう）し，風にあおられ狂わしげに振りみだしたたてがみが，燃え輝く小熊座のうえに襲いかかり……そのしぶきで光を打消されんばかり—新潮世界文学，福田恆存訳）と述べて，過去分詞形としても用いている。

give は過去形としては gave が初期近代英語以来圧倒的に用いられた。これと並んで現在形の give が過去形として用いられたり，過去形の gave が過去分詞形として用いられることは可成り屢々起っている。Samuel Pepys(1633—1703，イギリスの日記文の大家）の書いた「日記」('Diary') の中にも，"This day I sent my cozen Roger a tierce of claret, which I *give* him."—Pepys's Diary (August 21. 1667)（今日わたしはイトコのロジァーに飲んでもらおうとして，ボルドー赤ブドウ酒一組3本を送ってやった）とあり，Shakespeare の「ヴィーナスとアドニス」の中にも，"When he did frown, O, *had* she then *gave* over……"—Venus and Adonis. 571. と書いている。

古代英語の第6群に属する動詞の若干のものは，a-oo-a という母音変差を正しく持っている。例えば shake, forsake（見捨てる）や，スカンジナビヤ語としてブリテン島に入ってきて，同じ意味を表わす古代英語の niman（=take）を英語から駆逐してしまった take などがある。初期近代英語は，これらの動詞の過去形を過去分詞形として屢々使用した。

Shakespeare は彼の「ジューリアス・シーザー」の中で，

"Such instigations have been often dropp'd where I *have took*

them up"—Julius Caesar. Ⅱ. i. 50（こういう煽動文が，たびたび落ちているのを，自分は拾いあげた—研究社訳注叢書，沢村寅二郎訳）と言っているし，また mistake という動詞の場合にも，

"Then, Brutus, I *have* much *mistook* your passion"—Julius Caesar. Ⅰ. ii. 48（じゃ僕は大分君の心中を誤解していたよ）と言っている。この群に属する動詞 stand（とその複合語の understand）は，その古い過去分詞形の standen を失い，その過去形である stood が16世紀以来過去分詞の役を勤めている。現在形の stand も，そのまま過去分詞形として用いられ，これと並んで stand の弱変化の standed も過去分詞形として用いられた。アングリカン教会団体の宗教条項第14章にも，"a tongue not *under-standed* of the people"（人々の理解しない言葉）と出ている。

第1群に所属していた動詞には write, smite（強く打つ），stride, ride, rise, drive などがあるが，それ等は古代英語の過去・単数形の wrāt, smāt, strād, rād, rās, drāf から，近代英語の過去形の wrote, smote, strode, rode, rose, drove えと規則正しい発展を示しており，同様に古代英語の過去分詞形である writen, smiten, striden, riden, risen, driven から近代英語の過去分詞形の written, smitten, stridden, ridden, risen, driven えと発展した。

write（書く），ride（乗る），と rise（上る）に就いて言えば，極めて最近に至る迄，標準英語の中で，過去形で writ と wrote との間で使用上の動揺が続いていたし，rid と rode との間にも，また ris と rose との間にも使用上の動揺があった。という訳で古い時代の過去・複数動詞であった writ が write の過去形として，アメリカ俗語の中で用いられているのも，奇異とする理由はないと言える。またこの群の動詞の過去分詞形は，17—18世紀において屢々 -en を添えずに，rid, writ, bit, smit の語形で用いられた。その上，それ等の過去形の (a)rose, drove, rode, smote, strove, wrote は何れも過去分詞として用いられたし，18世紀末期に至る迄も然も文学英語の中で過去分詞として至極普通の事として起っ

ていた。例えば James Boswell（1740—95，英国の文人で忠実な伝記作家として有名，Life of Samuel Johnson の著者）が1763年12月30日発刊の London Journal 誌上で，"I imagined that your father had *wrote* in such a way……"（わたしは，あんたのお父さんはそんな書き方で書いたんだと思ってました）と記している。この群に属していた他の動詞例えば glide, gripe, writhe（〔raiδ〕あがく）などは弱変化動詞へ転化したが，又別に，英語からすっかりその姿を消したものもあった。

古代英語から今日に生き残っている鼻音子音（nasal consonants）を持った第3群に属する総ての動詞は，それ等の強変化活用を標準英語の中に保持している。そして，-n, -m, -nk または -ng を持つ begin, swim; drink, sink, shrink, stink（悪臭を放つ）; spring, sing, ring などは，今日平常用いる標準英語の中で，-i（不定詞形）-a（過去形）-u（過去分詞形）という活用型を守り，例えば begin-began-begun のように活用して，古代英語時代の過去単数形 -a を保持している。

然しながらこれ等の動詞にあっても，初期近代英語の時代以来，それ等の古代英語の歴史的過去形と過去分詞形との間に可成りの使用上の動揺が起っている。ただ18世紀において -u を持った過去分詞形を過去形として用いる事が圧倒的に優勢ではあった。例えば Shakespeare も彼の『お気に召すまま』の中では，歴史的過去分詞形を過去分詞として用いて，"or……I will scarce think you *have swum* in a gondola"—As You Like It. Ⅳ. i. 38（でないと，君がゴンドラに乗ったとは，ちょっと思えないだろう—研究社訳注叢書，松村寅二郎）と言っているが，他方『ハムレット』の中では，反対に過去分詞形を過去として用いて，

"But, orderly to end where I *begun*,
Our wills and fates do so contrary run
That our devices still are overthrown"-Hamlet. Ⅲ. ii. 220（さて，つまりは，こうなろうか。人の志と運命とは全くあい反して動き，思い定めしことも，かならず覆（くつがえ）され，……—新潮世界文学，福田恆存訳）と言っている。

Shakespeare では -u の語形を用いる過去・叙実法語法が非常に多く，動詞 drink の場合にも，「アントニーとクレオパトラ」の中で，"I *drunk* him to his bed"—Antony and Cleopatra. Ⅱ. 5. 21（私はあの方を酔わせて寝かせてしまった—新潮社世界文学，福田恆存訳）と言っている。

Atwood の「東部合衆国における動詞の形態概観」によれば，ニューイングランド地方と中部大西洋諸州においては，drink の過去形として過去分詞形の drunk を用いることが今日なお普通の事として行なわれており，同様に過去分詞形の shrunk を過去形として用いる事が，東部合衆国諸州の全域に亘って，教養人・非教養人の別なく，また老人・若者の区別なく，総ての人々の間に極めて優勢に行なわれている。Atwood の現地調査に応じて被調査者となった教養あるニューイングランド人のおよそ半数と，中部大西洋諸州での被調査の数の僅か⅓が，drink-drank-drunk という過去形・過去分詞形の標準的結合型を使用していた。この標準型活用形を用いていなかった住民の大部分は，過去形・過去分詞形の区別なしに，その一方だけで両方の機能を行なわせる用い方をしていたという。

-a を持ったこれ等の動詞の過去形を（殊に drink の場合に著じるしいが）過去分詞として用いる用法は，英国でも，初期近代の英語以来教養人の間に可成り普通に行なわれた。

Jespersen (1860—1943，デンマークの言語学者・英語学者；主著は Language; Its Nature. Development and Origin, 1922) は，英国の文人 Scott（1771—1832，小説家・詩人），Byron（1788—1824，詩人），Shelley (1792—1822，叙情詩詩人), Keats (1795—1821，詩人), Dickens（1812—70，小説家），Trollope（1815—82，小説家），Kingsley 1819—75，著述家）から，そして現代文人では Robert Graves (1895—詩人・批評家・物語作家）から，drank を過去分詞形として用いた用例を指摘している。Boswell もまた彼の London Journal 誌（1763年）の中で，"……he told me that he *had* once *drank* a bottle of sherry."（彼はシェリー酒をひとびん飲んだ事があったと私に語った）と言ったし，

"Mr. Johnson and I *had* formerly *drank* the health of Sir David Dalrymple."（以前にジョンソン博士と私はデヴィッド・ダルリムプル卿の健康を祝して乾盃したことがあった）と書いている。drunken, shrunken というもっと古い時代の過去分詞形は形容詞として起っている。run（中世英語で rinnen）の場合には，過去分詞の持っていた母音 u が，初期近代英語の時代に，その現在時制形の中へも持ち込まれた。run を過去形として用いて，過去分詞形と同形にする用法は，初期近代英語の時代から起り，今日なお民俗談話の中で普通に行なわれている。古い英語の時代に過去時制・複数動詞であった begun や swum が，アメリカ俗語の中で過去形として用いられていることは前述した。

-nd を持っていた第3群動詞，例えば find, bind その他に就いてはここでは触れないでおこう。ただこの群に属していた動詞では，中世紀に弱変化動詞に加わったものが多く， limb, bark, burn, carve, help, starve, mourn, yied, yelp, melt, swallow, swell などその数は多いという事を指摘するに止める。ただ help に就いて一言すれば，help の古い時代の強変化過去形 holp は17世紀迄は過去形として普通に用いられていたし，今日でも非標準的語法（nontandard usage）として生き残っている。help の古い時代の過去分詞形であった holpen は，この語が欽定訳聖書の中で，例えば「ルカ伝」に，"He *hath holpen* his servant Israel"—Luke i. 54（神はその召使イスラエルを助け給えり）とある章句の中で用いられている事から懐しい語である事は疑いない。holp と holpen の両語とも「意識的古体」（conscious archaisms）として，殊に Tennyson（1809—92, 英国の桂冠詩人）や，Mrs. Browning（Robert Browning の妻で詩人，1806—61）のような詩人によって用いられた。

第4群に属し，今日に生き残っている主要な動詞としては，bear, break, shear, steal, tear, come などがある。総てこれ等の動詞は強変化活用形を標準英語の中で今日に保持しており，最後の tear と come とを除いて，他の総ての動詞は古い時代の ea—a—o（古代英語では e—ae—o）型から生じた ea—o—o 型の活用を持っている。steal—stole—

stolen のようにである。

他の群に所属していた多数の動詞が，中世英語の時代においてこの第4群の活用型を採用するに至った。例えばspeak, weave, tread や, heave（持ち上げる），swear などその他がある。初期近代英語において，過去形に a 若しくは o を用いる事において可成りの動揺があり，例えばspoke-spake, tore-tare, got-gat, bore-bare, broke-brake のように両形が用いられた。 a- 形の使用は欽定訳聖書の「コリント」の章にある，"When I was a child, I *spake* as a child……"—I. Cor. X. iii. 11.（わたし達が幼な子であった時には幼な子らしく語り……）という一節も，我々には懐しい筈である。come は初期近代英語の中で屢々過去形として起った。ペピスの「日記」にも，"Creed *come* and dined with me……"—June 15. 1666（クリードが，やってきて，わたしと一緒に食事を取った）と記している。この用法は，また民俗談話の中では今日にも及んでいる。

強変化動詞の7つの群の何れにも属していないが，過去・過去分詞を作る時に各々異なった母音を持つ1群の動詞がある。これは Hornby 教授（1935—38 東京文理科大学講師）が「not の24のお友達」と称するもので，文法的には「変則動詞」（Anomalous Verbs）と名付け正規の活用形を欠く動詞である。現代英語の文法で通常助動詞（Auxiliary verbs）として扱う種類のものであるが，そのうち動詞としても働くものに，be, have, do などがある。ここで我々が触れようと思うものは，"be" 動詞である。

"be" 動詞は不定詞の語根，過去形の語原，および過去分詞形を作る語原が何れも異なるもので，3個の語原の「混合変化活用」(Mixed Conjugation) を作っている。それは es（=am, is, are, art)—wes（=was, were)—bheu（=be, been）のように3種の語根の混合であるが，語根から言えば been に所属する。他の動詞の場合は，活用の際3人称・単数・現在時制に -s を添える以外は語形変化を持たないのに対して，"be" 動詞の語形変化は，現在形・過去形の取る語形が，主語の人称・

数の異なるに応じて複雑な語形を持つ。古代英語の人称と数に応ずる多様な変化形を今に残しているのはこの1語のみであり文法上興味ある事象である。

〔註〕これに類する動詞に 'go' がある。go—went—gone と活用するが，過去形の went の語根は弱変化動詞の wend（=turn）で，その活用は wend—went（or wended）—wended で，このうちの過去形の went だけを取り込んできて出来た混合変化活用を行なっている。

以上我々は動詞の活用形に焦点を絞って我々の観察を行ってきた。そして "be" 動詞の活用形に触れたいま，更にこの "be" 動詞が2人称の thou と you と共に用いられた場合の特殊な歴史的表現形式をここで扱っておくのも無駄ではないだろう。アメリカの俗語の中で用いられる "you was" を落したくないからである。

我々は先に，アメリカ俗語では I has, You is と言うと言った。そこで理解の便宜のために，ここでは You was に触れてみよう。

アメリカの偉大な辞書編輯家である Noah Webster（1758—1843）はこの構文を「良い語法」であると言っている。少し冗長になる嫌いはあるが，その依ってきたる所を眺めてみよう。

2人称・単数・主格の相手を指すに用いた人称代名詞の thou は，目的格に thee，所有格に thy と thine（独立形）を持っていた。分り易く言えば，thou—thy—thee—thine というひと揃いのものである。13世紀という早い時期に，2人称・複数・主格の代名詞形の ye，その目的格に you，所有格に your というひと揃いのもの，即ち ye—your—you が，所謂「丁寧な複数」('polite plural') という語法で，相手が単数である場合にも使用することが始まった。この用法は寧ろ「丁寧な単数」('polite singular') と呼ぶ方が適切であるかも知れない。フランス語の tu（お前は，お前が），vous（あなた，あなたがた）の用法に真似て，英語でも，歴史的には複数形であるこれ等 ye—your—you の語形は，社会的地位とか年令とかが，自分より優っている単数の相手に対して話しかける場合や，上流社会人士の相互の間で話しかける場合に用いられた。もっとも上流社

会生れの男女恋人同志の親密な間柄では，うっかり口を辷らせて，th- 形即ち thou，を使ってしまう事もあったであろう。このようにして英語は th- 形と you 形との間の用法の違いを見失うことによって有用な文学的考案物をも失う事になった。そして th- 形と you 形とのどちらを選んでもよい時代が訪れた。とは言え Shakespeare の初期近代英語においては，なお両者の使用上の区別は残っていた。例えば「ハムレット」において彼は巧みな技巧を働かしてその両形を区別しながら用いている。

Qu〔een〕　Hamlet, *thou* hast *thy* Father much offended.

Ham〔let〕　Mother, *you* have my Father much offended.

Qu〔een〕　Come, come, *you* answer with an idle tongue.

・　・　・　・　・

Qu〔een〕　What wilt *thou* do? *thou* wilt not murder me?

—Hamlet Ⅲ. iy. 9—21

（妃　ハムレット・お前のため，父上は大変なお腹だち。

ハムレット　母上のためにも大変なお腹だち。

妃　どうして，どうして，そのようなたわいのないことを。

・　・　・　・　・

妃　なにをする？　殺そうとでも？

—新潮世界文学，福田恆存訳）

ハムレットと女王との間にやり取りされたこのセリフを，W. Franz は彼の Shakespeare-Grammatik, 2nd. ed. p. 256,（1909年）で解説して次のように述べている。

What wilt thou do? における女王の発声の thou は強い激情を表わしており，ハムレットの "Mother, you have……" の you は，母親という目上に対する一層形式的四角ばった言葉を使うことによって内に非難の意を含めていると。

2人称・単数代名詞のこの壮重な th- 形は，Shakespeare がそれを用いた16世紀に入る前に既に宮庭用語からは勿論のこと，上流社会の言語からも，殆んど消失し，一般国民は標準的慣用語法の単なる一部として使用

するに留まっていた。そして18世紀に至っては英語からは全くその姿を消し，僅かに幾つかの局地的方言に残っている。

アメリカ中西部（The Middle West）からロッキー山脈地帯の極西部（The Far West）方面に住み着いている年配のクウェイカー教徒達も，主格と目的格の両方に今日なお thee を用い，Thee has（＝You have）……のような言い方を残している。

我々は幸いにも，「アンクルトムの小屋」の第8章「クェーカー教徒の部落」の中で，教徒の用いる thee の用例を手近かに持っている。

"*Thee*'ll see *thy* father, little one. Does *thee* know it? *Thy* father is coming," she said over and over again, as the boy looked wonderingly at her.（「坊や，じきにお父さんに会えるんですよ。おわかり？ お父さんがおいでになるんですよ」と彼女は繰り返し，繰返し言ったが，坊やは不審気に彼女を見つめていた）。

また欽定訳聖書や祈祷書の中にこの th- 形が用いられている所から，人々が神に関連して言葉を述べる場合にはこの代名詞を普通に用いている。

例を同じ物語の中から引用しよう。

Meanwhile, within the door, another scene was going on. Rachel Halliday drew Eliza toward her, and said, "The Lord hath had mercy on *thee*, daughter; *thy* husband hath escaped from the house of bondage."（そんな間にも，ドアの中では，別の場面が展開していた。レイチェル・ハリデーはイライザを引き寄せて言った。「神様はあなたに恵みを垂れ給うた。あなたの夫は奴隷の家から遁れて来たのです」。

"*Thou art* safe here by daylight, for every one in the settlement is a Friend, and all are watching. It has been found safer to travel by night."（明るいうちはここで大丈夫なのです，この部落の人はみんな「仲間」なのですし，みんなが見張っています。夜なかの旅の方が安全だということが分っているのです）。

神に関連してでなく，人間に関する場合には，今日では y- 形を用いなければならない。大事なことは you を用いた場合には，ye が持っていた歴史的使用法に鑑みて，文法的に言えば，その単なる人間は，2人若しくは2人以上の複数を意味内容に持つものと見做すべきである。

英国では前述のようにして，2人称・単数代名詞の th- 形が消滅した結果として，それ迄2人称・複数代名詞としてひと揃いの格形を維持しながら，ye—your—you の語形変化で用いられていた y- 代名詞も，単数 thou の代用語となり，同時にまた16世紀末葉迄には，主格の ye と目的格の you との間に存在した古い区別も次第に消滅することになった。

けれども1611年に世に出た欽定英訳聖書の中では，なお両者の区別は維持されていた。旧約聖書の「ツル記」では，"The Lord deal kindly with *you*, as *ye* have dealt with the dead, and with me. The Lord grant *you* that *ye* may find rest……"—Ruth. I. 8—9（あなたがたが，死んだふたりの子とわたしに親切をつくしたように，どうぞ，主（しゅ）があなたがたに，いつくしみを賜りますよう。どうぞ，主（しゅ）があなたがたに夫（おっと）を与え，夫の家で，それぞれ身の落ち着き所を得させられるように—日本聖書協会，1955年改訳）と書いている。当時の作家達のうちにも，両者を区別して用いた者もあった。また女王 Elizabeth 一世（1533—1603）は，you だけを主格と目的格の両機能に用いたようである。

アメリカの俗語では ye はごく普通に用いられ，主格と目的格の区別もない。「アンクル・トムの小屋」の第10章から1文を引用しよう。

> "*ye* see what *ye'd* get if *ye* try to run off. These *yer* dogs has been raised to track niggers; and they'd jest as soon chaw one on *ye* up as eat their supper. So, mind *yerself*."（「逃げようなんてしたらどんな目に会うか分るだろうな。ここにいる犬は黒ん坊を追いかけるために飼ってあるんだ。貴様達の誰かにかぶりと食いつくことなんか朝飯前の話しさ。気をつけるがいいぞ—ye'd=ye would=you would; yer=your; niggers=ne-

groes; they'd=they would; jest=just; one on ye up=one of you up; yerself=yourself)

そして，目的格のこの you が，やがて主格の ye を追放して，自ら主格の座にも座ることになった。

このようにして you は，最初は2人称・複数・目的格機能から出発して，後に2人称・単数・主格の thou の代用を果すようになり，同時に thou の複数である ye の機能をも併せ引受け，遂には ye をも標準英語から駆逐して，2人称・単数・複数・主格・目的格という幾つもの機能をその一手に引受けるに至った。こうして生れた you は逆にまた，相手の数と格の区別を表現出来ないことになった。

そこで17世紀後半に発し，18世紀の全期間を通じて，多くの談話者は，単数に you was を，複数に you were を区別して用いるに至った。

James Boswell（『1740—95』前出）は彼の編輯雑誌 London Journal (1762—63) の中では徹頭徹尾，単数に you was を用い，かつ，この you was は Samuel Johnson（『1709—84』英国の文人・辞書編集家）自身の唇から出たものであるとさえ報告して，"Indeed, when *you was* in the irreligious way, I should not have been pleased with you."（あんたが不信心者の暮し振りだったら，わしは気に入らなかっただろう）と Johson が述べたと記している。もっともこの語法に関しては，Bishop Lowth は，彼の有名な Short Introduction to English grammar「英文法入門」1762）の中で，Boswell のこの *you was* を「巨大な語法違反」("an enormous Solecism") と厳しい口調で非難しており，また一方 George Campbell（〔kǽmbel〕）は，彼の Philosophy of Rhetoric（「修辞哲学」）(1776) の中で，"it is ten times oftener heard"（「*you was* は you were より10倍も耳にする」）と証言している。とは言えこの Boswell も，彼の Life of Johnson の第2版の中では修正して単数・複数両用に *you were* を用いている。

you was は教養あるアメリカ人の用いる極く普通の語法でもあった。George Philip Krapp は，彼の The English Language in America

(New York, 1925.「アメリカにおける英語」）の中で，John Adams（《1735—1826》米国第2代大統領・独立運動の功労者）が火災で家を焼かれた友人に宛てた慰問の手紙に，you was を用いたことを引証してその手紙の次のような原文を掲げている。

"You regret your loss; but why? *Was you* fond of seeing or thinking that others saw and admired so stately a pile?"（あんたは家の焼けたことを悔んでおいでだが，それは何故ですか。あんたは他の人々が，あんなに堂々とした建物《皮肉った言い方》を眺めたりほめたりしている様子を，あんたが見かけたりそうだと思っていることが好きだったのですか)。

話しをアメリカ俗語の領域に進めて，「ハックルベリー・フィンの冒険」その他から you was の例を1—2個引用しておこう。

"……but I don't know—maybe *you was* asleep, and didn't know what *you was* about"—（第30章）（……わしに訊いたって分かりゃしねえやなあ—多分おめえは眠っててよ，自分が何をやっているんか知らなかったんじゃねえのかな)。

"Lennie said; I thought you *was* mad at me, George"「二十日鼠も人間も」（第6章）（レイニイは言った，「おまえは，おらのことを，おこっていると思っていたがな，ジョージ」)

とは言え，この慣用語法も英国では19世紀初頭に及んで次第に上流社会から人気を失うに至った。Noah Webster が，単数と複数の別々の明晰な語形を持つことこそ，上流人士の論理性・秩序性・理性に訴えるものであり，そして上流人士こそ本質的に「理性時代」（Age of Reason）の生みの子であるという論法を打ち立てて，you was のこの用法を弁護し是認したけれどもであった。

以上の記述で，アメリカ俗語の現在の姿と，それの原因をなす古い時代からのイギリスの英語の発展の過程をひと亘り眺める仕事を終ろうとしている今，我々が先に本稿の第Ⅲ篇で，アメリカに行なわれている方言の地域的区分の項で引合いに出したスタインベックの「怒りの葡萄」（Grapes

of Wrath）の一節をここに掲げる事にしよう。アメリカの俗語は今日行なわれている標準英語の語法から見れば誠に遙かまで法則を逸脱し遊離したものに見えるであろうけれども，その特有の言語慣習は，イギリスの初期近代英語が持っていた語法の一部を今日に伝える貴重な語法であることを示しているからである。

'I *knowed you wasn't* Oklahomy folks. You talk queer kinda—That *ain't no* blame, you understan'; (「わしは，お前さんがたがオクラホマ者じゃないと，すぐ分っただよ。妙な話し方をするだで—そりゃ，ちっとも構わねえだがねえ，そんなことは」)

'Ever'body says words different'; said Ivy. '*Arkansas folks says* 'em different, and *Oklahomy folks says* 'em different. And *we seen* a lady from Massachusetts, an' she said 'em differentest of all. *Couldn' hardly* make out what she was sayin'; (「みんながちがった言葉でしゃべるでねえ」とアイヴィは言った。「アーカンソー者は変った言葉を使う。一度マサチューセッツ生れの婦人に会っただが，これはまた，どこの誰ともちがう話し方だった。いっていることが，何が何やら，ほとんど分らなかっただよ」—新潮文庫・怒りの葡萄・大久保康雄訳)

上と同じ主旨から，新規に，もう一文を掲げることにしたが，時間を急がれる読者は次の引用文はスキップして頂きたい。

Mark Twain の「ハックルベリー・フィンの冒険」の第13章の一節である。

When *we was* three or four hundred yards down-stream, we *see* the lantern show like a little spark at the texas door, for a second, and we *knowed* by that *the rascals* had missed their boat, and *was beginning* to understand that *they was* in just as much trouble, now, as Jim Turner was. (3—4百ヤードも川を下（くだ）ったときだ。船員室のドアんとこに，カンテラの灯が一瞬チカッとちっこい火花みたいに見えた

んだ。そこで悪党どももボートが無くなったことに気が付いて，自分たちも今じゃジム・ターナーとおんなじ羽目に落ち込んだことを悟り始めたのが，おらたちにも分かったんよ—we see=we saw; know-ed=knew; texas ミシシピー川を航行する汽船の甲板上にある士官室や水先案内人室には州の名をとって名付ける習慣がある; show=look)

Then Jim manned the oars, and we took out after our raft. Now was the first time that I *begun* to worry about the men—I *reckon* I hadn't had time to before. I *begun* to think how dreadful it was, even for murderers, to be in such a fix. *I says* to myself, there ai*n't no* telling but I might come to be a murderer myself, yet, and then how would I like it? So *says I* to Jim.（それからジムが櫂をとって，おらたちはあの筏の後を追っかけた。この時分になって始めておらはあの男どもの事が気にかかってきた—今まではその暇が無かったんよ，きっと。たとえ人殺しだって，あんたら羽目に置かれたらば，どんなにかおっかねえだろうって，おら，そんな気がしてきたんよ。したから腹の中で考えた，このおらだって，これから先，人殺しに成らねえかどうか，わかったもんじゃねえ。そう成った時に，あんたら目に会わされたらば，一体どんな気がするべえかなんてな。したからジムに言ったんよ—took out=started; I reckon=I reckoned=I thought; fix《話》苦境; I says=I said; there ain't no telling=there wasn't no telling=there was no telling; but=that……not)。

……By-and-by a flash showed us a black thing ahead, floating, and we made for it.（……そのうちに，ピカッと光った途端に，おらたちの前を流れてる黒い物が見えたんで，おらたちはそれに向って漕いだんだ)。

It was the raft, and *mighty* glad *was we* to get aboard

of it again. We *seen* a light, now, away down to the right, on shore.（そいつがおらたちの筏だったんよ。もう一ぺんそいつの上に乗っかった時は嬉しかったなあ。それから右手のずっと下（しも）の方の岸のあたりに灯りがひとつ見えたんだ—mighty=mightily; we seen=we saw）。

So I said I would go for it. The skiff was half full of plunder which the gang *had stole*, there on the wreck.（そんでおらはあそこへ行くって言ったんだ。ボートは悪党どもがあの難破船から盗んだ分捕り品で半分は埋（う）まっちまってたけん—skiff,（かいで漕ぐ）小舟，had stole=had stolen）。

だからして，或る意味では，標準英語の文法組織と，アメリカ俗語の文法組織との間の相違とは，或る期間に起った屈折《名詞・代名詞・形容詞などの数・性・格のちがいによって起る語形変化，declension》の推移と，「活用」《数や時制のちがいによって起る動詞の語形変化，conjugation》の推移との両者を含めた意味での「語形変化」《inflectional changes》が辿った変化の速度の相違であるとも言える。

標準アメリカ英語が，標準英語の「進化」に較べて「遅行性」を持つということは，我々が先に指摘した所であるが，この遅行性は，アメリカ俗語の領域において，もっと甚だしく，しかもその「語形変化」（「屈折」と「活用」とを含めた意味での）において，そしてそのうちでも動詞の活用形において，その極限に達していると言えるであろう。

疑いもなく合衆国に於ては，1つの社会階層から他の階層へと，人がその所属社会を容易に変え得る社会事情に起因して，人が使用する言語の上でも，容認し得る標準英語と，無教育者の用いるものとしての俗語との間の境界線は，今や誠におぼろげな線にしか過ぎなくなった。最高度に規則の厳格な学校教科書の標準から眺めれば，アメリカの立法議会や日常の商取引に用いられている言葉のうちの或るものは，標準英語の検門を無事に通過することは不可能となっている。教科書英語尊重のこの言語意識は，学校社会に於て行なわれているところの「俗語は卑賤なものである」とす

る非現実的な言語の扱い方に支持されて，時には標準英語と俗語との境界線上に集まる半ば俗語的言葉に非難の声を浴せるという結果さえ起っている。更にもっと屢々起る事であるが，このような言語意識は，俗語を「辱かしいもの」とする言語意識を一般市民の心に起させて，自分の用いる言葉について，罪悪感的異常心理（guilt complex）さえを感ぜしめるに至っている。James West は彼の社会学の研究書 Plainville（「プレインヴィル町」）の中で，このようなアメリカ人一般の言語意識に関して次のような適切な解説を与えている。

「劣等英語」（'Inferior English'）は，学校教師，新聞，ラジオ等が口を揃えて，方言（dialect）の持つ語形（forms），句（phrases）や発音（phonetics）に関して，それを用いることを辱かしく思う（self-conscious）ように呼びかけているという事が原因で，自分の口から劣等英語を喋ることは，何びとでも，また何時でも何処でも卑しい事として相手に頭を下げてお詫びを言わねばならん性格のものであると考える風潮が拡がっている。文化に立ち遅れた辺境奥地の住民を除いた総ての人間は，彼等自身の社会階級以下の人間どもや，自分の属する世代より古い世代の人間が用いる談話の層雲または地層（stratus or stratum of speech）を屢々嘲笑し，下手にもじって使用する。が然し同時に心の中では自分の用いるもじり方に確固たる自信が持てないでいる，と。

このような事態のために，十分な教育を持った人々でさえも，自分達の用いる談話が本質的に適切で正確なものかどうかに就いて安心して確信を持てる人間は極めて少い。

俗語の価値判断について，このような誤れる現在の事態の下で何等かの，らしい変化が起る迄には，学校社会の人々が，言語に対するもっと分別のある態度を持ち，かつ少くとも半世紀に亘ってその態度を持続し定着させる事が必要であろう。それ迄は卑俗談話（vulgate speech）が如何に興味ある言語現象であるかを示すために，卑俗語の持ち味を賞味すると同時に，然しながら，科学的に研究する事が最も緊急な主題となっている事を忘れてはならない。

参　考　文　献

A Dictionary of Modern American Usage by H. W. Horwill. Printed in Japan (1958)

The Oxford English Dictionary. (1933) Oxford, Clarendon Press.

Webster's Third New International Dictionary. Springfield, Mass. G. & C. Merriam Co.

Compton's Pictured Encyclopedia. Chicago. F. E. Compton Company, Division of Encyclopedia Britanica, Inc. 15 vols.

American English by Albert H. Markwardt. (1958)

Webster's New World Dictionary of the American Language. (1964)

Dictionary of American Slang by Harold Wentworth & Sturt Bery Flexner (1967)

The Origin and Development of the English Language by Thomas Pyles. (1964)

The American Language by H. L. Mencken. (1936) University of Florida

Supplement 1. *The American Language* by H. L. Mencken (1945)

Supplement Ⅱ. *The American Language* by H. L. Mencken (1948)

A Dictionary of Americanisms on Historical Principles edited by Mitford M. Mathews (1956)

古代英語　厨川文夫　英語英文学講座　昭和8年　新英米文学社

近代英語の成立（上）　中島文雄　　同　上

Logan Pearsall Smith, *The English Language* 三浦順治訳，千城出版

England by W. R. INGE, 1926

アメリカ英語，歴史的及び地方的研究，重見博一，英米文学社（昭和21年）

現代アメリカ英語の研究，岩崎良三，小学館（昭和21年）

現代米語文法，尾上政治，現代英文法講座（昭和32年）

John Steinbeck-*The Grapes of Wrath* (1936)

Mark Twain; *The Adventures of Huckleberry Finn* (1884)

John Steinbeck; *The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County* (1867)

Mark Twain; *Tom Sawyer Abroad*

H. C. Wyld; *A History of Modern Colloquial English*. Basil Blackwell, Oxford, 1956

アメリカ英語の知識と用法，竹中治郎（昭和43年）泰文堂

英米文学史，大和資雄（昭和42年）角川文庫

ハックルベリー・フィンの冒険，野崎孝訳（昭和46年）講談社文庫

マーク・トウエン短編集，古沢安二郎訳（昭和46年）新潮文庫

二十日鼠も人間も，高橋正雄・吉川道夫訳註（1970年）南雲堂

アンクル・トムの小屋，田中三千夫訳注（昭和30年），研究社訳注双書

Charles Dickens; David Copperfield

Beecher Stowe; Uncle Tom's Cabin

John Steinbeck; Of Mice and Men